

学校の働き方改革実施サポート事業を終えて
－ 「働き方改革」のその先に「児童の笑顔」があるように －

豊田市立堤小学校
校長 小山真司 氏

1 学校の概要

- (1) 学区に農地が広がる、古くから開けた地域であり、再来年度に開校150周年を迎える歴史ある学校である。
- (2) 3世代同居の家庭も多く、家庭の教育力が高い点が特徴である。学校に対しても協力的であり、学校改革を行いやすい土壌がある。

2 事業概要

- (1) 令和2年度に豊田市教育委員会から「学校の働き方改革実施サポート事業」の委嘱を受けて実施した、単年度事業である。
- (2) NPO法人「ブルーバード」とのコンサルタント契約に基づいて実施した。
- (3) コンサルタントと学校をつなぐ役割として、「先生の幸せ研究所」の澤田真由美所長に参画してもらったため、「学校の目線」を生かした改革となった。

3 「働き方改革」の目指すもの

- (1) 改革の目標を「意味のある時間・ゆとりを生み出す」と設定した。
- (2) 教師の側からは、ゆとりのある時間を生み出すことで、児童と触れ合う時間が確保でき、教材研究や学年部での情報交換、自己研鑽を行えるようになることを目指した。
- (3) その結果、児童にとってよりよい教育を提供できるようになる。あくまでも「児童のための改革」であることを重視した。

4 コンサルタント導入について

- (1) 学校の状況を理解してもらえるよう、地元豊田市内の企業に依頼した。
- (2) コンサルタント導入の意義は、「外部の目」から見て改革を行える点であり、改革が短期間で大きく進むことが期待された。
- (3) 一方で、外部は学校の状況を「ドライ」に見ており、学校にとって必要な業務まで削減されてしまうことが懸念された。
- (4) そのため、「学校の目線」を改革に残せるように、元教員である「先生の幸せ研究所」の澤田氏が参画することとなった。

5 プロジェクト編成について

- (1) 働き方改革委員会を設置し、全職員から意見聴取して組織づくりを行った。
- (2) 職員の発案により、「行事選抜チーム」、「宿題選抜チーム」、「部活動選抜チーム」

の三つのプロジェクトを立ち上げた。

6 行事選抜チームの取組

- (1) 運動会、持久走大会、縄跳び大会等、すべての既存行事を新たな目で見直し、改革案を検討した。
- (2) 児童の活躍の場を残すことを大前提とし、準備や練習時間の削減を行った。
- (3) 「学芸会」を「学習発表会」に代えることで、80時間の削減につながった。
- (4) 運動会は前年と同規模で実施するが、新型コロナウイルス感染拡大の面からも応援合戦を取り止め、9時間の削減につながった。縦割り活動で育てたい6年生のリーダー性については、他の場面で保障していくこととした。
- (5) 持久走大会、縄跳び大会を授業の中に位置づけることで、4時間の削減につながった。
- (6) 改革は、職員会議、日課、個別懇談会等の様々な行事に広がり、大幅な時間削減が行えている。

7 宿題選抜チームの取組

- (1) 宿題を、「け・て・ぶ・れ（①計画、②テスト、③分析、④練習）」による自主学習に変更した。
- (2) 点検や丸付けは保護者にも協力を依頼し、教師の負担を削減した。
- (3) 教師は自主学習のやり方が分からない児童や成果が出ない児童の指導を行う。
- (4) 教師が休み時間に行っていた宿題点検等に費やしていた時間のゆとりが生まれ、教師が児童と触れ合えるようになった。
- (5) 保護者から「学校が宿題を出してくれた方が楽だ」という声もあるが、家庭に返していく方針である。

8 部活動選抜チームの取組

- (1) 令和4年度の部活動廃止に向けて準備を始めた。
- (2) 令和4年度中に部活動をクラブ活動に移行し、代替となる学校外の活動を積極的に紹介した。
- (3) 年間40時間超の削減につながった。

9 「働き方改革」で大切なこと

- (1) 元年度に45時間越えの職員の割合が59%だったのに対し、2年度は53%にまで減っており、一定の成果があった。今年度は8月までの平均で30%程度まで下がっており、今後も改革を続けていきたい。
- (2) 「数字の改善≠校長の喜び」であり、様々な削減の中で職員のやり甲斐をどう保障するかが現在の悩みである。
- (3) 外部の力を導入することは、職員の意識改革につながり、成果は大きかった。
- (4) 働き方改革に使う時間は「よりよい職場環境への未来の投資」となる。
- (5) 「時間の確保」「ゆとりを生み出す」「内容の精選」のその先に、何よりも「児童の笑顔」がなければならないことを強く感じた。